



Title	<書評>Leonard Lawlor, Derrida and Husserl : The Basic Problem of Phenomenology
Author(s)	森川, 勇大
Citation	共生学ジャーナル. 2020, 4, p. 203-209
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75394
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

Leonard Lawlor

Derrida and Husserl: The Basic Problem of Phenomenology

Indiana University Press、2002、286 頁

森川勇大*

1. はじめに

本稿で取り上げる『デリダとフッサール：現象学の根本問題』は、ジャック・デリダ（1930-2004）の初期思想、すなわち 1950 年代後半から 60 年代までの思想の形成過程を理論的に、かつ詳細に描き出す著作である。本書の特徴は、デリダの難解な著作を丁寧に読み解くその精緻で厳密な筆致と、初期デリダの数々の仕事を連続的かつ有機的に記述する体系性、そして当時のデリダに影響を与えた研究者たちへの数多くの言及（後述）にある。

本書の著者であるレオナルド・ロウラー（1954-）は、19 世紀から 20 世紀の大陸哲学を専門とするペンシルバニア州立大学の教授であり、デリダを中心にベルクソン、イポリット、メルロ＝ポンティ、フーコー、ドゥルーズなどさまざまな人物を取り上げ、広範な主題の研究を手掛けている研究者である。本書は彼の二番目の単著である。他の著書には、*Imagination and Chance: The Difference between the Thought of Ricoeur and Derrida*（1992）、*The Challenge of Bergsonism: Phenomenology, Ontology, Ethics*（2003）、*This is not Sufficient: An Essay on Animality and Human Nature in Derrida*（2007）、*From Violence to Speaking out: Apocalypse and Expression in Foucault, Derrida and Deleuze*（2016）などがある。

2013 年にデリダによる 1964-5 年の講義録『ハイデガー——存在の問いと歴史』（ガリレー社）が出版され、その講義録に関する研究成果を含む亀井大輔『デリダ：歴史の思考』が 2019 年に刊行されるなど、近年、初期デリダ研究の機運がにわかに高まりつつある。本書は、多くの哲学者との理論的対決のなかで形成された初期デリダの思想を解明する基本的な文献として、刊行から 15 年余りが経過した現在においても、なお参照されるべきものである。

* 大阪大学人間科学研究科博士前期課程 1 年。

2. 本書の構成

まず本節では、全体の構成を一望できるよう、本書各章の内容を簡単に要約する。本書は4部構成の全8章からなる著作である。以下、本書『デリダとフッサール』から引用する場合には、ページ番号をカッコつきの数字で示す。

第1章「現象学の根本問題としての発生」では、オイゲン・フィンクの論文「エドムント・フッサールの現象的哲学と現代の批判」の読解を通して、フィンクのフッサール現象学解釈が初期デリダへ与えた決定的な影響が明らかにされる。世界の起源もしくは発生の問題をめぐる、フィンクは現象学的研究を悩ませる三つのパラドックスを提出しているが、それらのパラドックスはいずれも現象学的な知を言語によって表現することにまつわる問題であり、デリダによる「エクリチュール」や「差延」といった概念を準備するものである。

第2章「現象学批判：「発生と構造」と現象学」の研究」では、「発生と構造」と現象学」におけるデリダの現象学批判が検討される。デリダは、発生の起源および終わりにおける直観的明証性の不在という問題を「カント的な意味での理念」の現前という目的論的な概念を用いて解決しようとするフッサールの姿勢を批判するのだが、このフッサール批判は、次の二つの形式を取る。第一に、発生における直観的明証性を保証できないフッサールを直観主義の立場から批判する、現象学的な批判。第二に、フッサール現象学の「原理の中の原理」としての直観主義そのものを問題視する、「超一現象学的な批判」(32)。特に後者の側面は、のちのデリダによる現前の形而上学批判との連続性という観点からみて重要である。

第3章「存在論批判：「人間の目的＝終わり」の研究」では、「人間の目的＝終わり」におけるデリダの存在論批判が検討される。デリダはハイデガーにおける存在の思考と現前性のあいだの密接な関係およびその関係に内在する人間主義的な前提に着目し、この前提を突き崩す「人間の目的＝終わり (fin)」を記述しようとする。本書にとって重要なのは、デリダのこの存在論批判が、現象学批判と同様に、現前性の価値づけへの批判を通してなされ

たということである。

第4章「弁証法の賭け金を上げること：『フッサー哲学における発生の問題』の研究」では、チャン・デュク・タオとカヴァイエスの二人の弁証法をそれぞれ批判的に検討し、デリダの『フッサー哲学における発生の問題』における発生の問題への回答を「根源的弁証法」として特徴づける。フッサーにおける発生の問題の解決策として、前者は発生を事実または質料の次元に還元することを、後者は本質または形式＝形相の次元に還元することを提案するのだが、デリダは両者の解決策をともに不十分なものであるとして、超越論的な次元と内世界的な次元の間の汚染＝混淆（contamination）としての新たな種類の弁証法を定式化し、弁証法の「賭け金を上げる」（up the ante）ことで発生の問題を解消することを試みる。本書にとって重要なのは、この試みがハイデガー的な存在論の強い影響の下でなされたということであり、また、この新たな弁証法＝「根源的弁証法」が、実際には現象学と存在論の弁証法となっているということである（83）。

第5章「あらゆるジレンマの根源、それは必然的に一つである：『幾何学の起源』序説」の研究」では、『幾何学の起源』序説』におけるデリダの「言語論的転回」が、イポリット『論理と実存』におけるヘーゲル解釈の強い影響下にあることが示される。本書にとって重要なのは、イポリットのヘーゲル解釈に従う形で、デリダが発生の問題を記号の問題へと変形させるということである。

第6章「形而上学よりも形而上学的に：「暴力と形而上学」の研究」では、「暴力と形而上学」におけるデリダのレヴィナス批判の検討を通して、レヴィナスにおける他性の概念がデリダを非－存在論的で非－ギリシア的な思考へと導いた経緯が述べられる。「暴力と形而上学」におけるレヴィナス批判は、言語の必然的な暴力性（「光の暴力」）を挫折させるはずの他者の他性が、当の暴力的な言語によって語られていることを問題視するものである。哲学的な言説によって捉えることのできない他性への注目を介して、デリダの思考は現象学と存在論の弁証法から、他性と差異の弁証法へと移行することになる。

第7章「記号の試練：『声と現象』の研究」では、『声と現象』における二人のフッサー、すなわち「現前の形而上学」を主導する存在として批判されるフッサーと、現前性における汚染＝混淆を記述する「徹底的なフッサ

ール」の検討を通して、「非－ギリシア的な非－現前の経験」としての「記号の試練」(the test (l'épreuve) of the sign) というモチーフを取り出す。

第8章「二時に正午を探すこと：『マルクスの亡霊たち』の研究」では、『マルクスの亡霊たち』の読解を通してデリダの後期著作におけるいわゆる倫理的・政治的転回が扱われ、その転回においてデリダが存在の問いから約束と記憶の主題へと移行していく過程が記述される。

3. 発生と構造の弁証法

本書の副題に記されている「現象学の根本問題」とは、第一章の題名「現象学の根本問題としての発生」に示されているように、発生の問題に他ならない。そしてこの問題は、ロウラーの見立てによれば、デリダの思考における根本問題でもある。「デリダの哲学の根本問題とは、デリダの最初の著書である『フッサール哲学における発生の問題』が示唆しているように、発生の問題である」(21)。このことは、本書のデリダ読解の基本的な指針であるとともに、本書におけるロウラーの中心的な主張でもある。

そこで本節では、ロウラーによる以上の主張をある程度明確に把握するために、発生の問題とそれに対するデリダの立場の発展という観点から、本書の議論を時系列に沿ってまとめなおしてみたいと思う。

デリダの初期著作の検討を通してロウラーが示すのは、さまざまな主題をめぐって展開する初期デリダの思考の根底に存する、発生と構造の弁証法の図式である。まず、デリダはこの図式を、数学的対象の存在に関するフッサールの思索(『算術の哲学』)の検討を通して獲得する。『フッサール哲学における発生の問題』(1953年から54年にかけて執筆され、1990年に出版された)における議論の出発点となるのは、数学的対象のイデア的な形式＝形相(構造)と、それを産出する意識の作用(発生)の関係をめぐる「アポリア」である(第4章)。デリダはこのアポリアの根源を、「超越論的還元は、「すでに構成されたもの」を完全には消去できず、世界の起源に到達することができない」(47)という事実のうちに見出し(この観点は、フイックによるフッサール解釈から得られたものである(第1章))、「根源的弁証

法」という概念によってその問題を解消することを試みる。つまり、デリダは発生と構造の関係をめぐるアポリアを、ある種の弁証法によって解消しようとするのである。

『発生の問題』において提示された発生と構造の弁証法という図式は、以降のデリダの思索の方向性を決定づけることになる。まず、「発生と構造」と現象学（初出の講演は1959年、『エクリチュールと差異』への収録は1967年）において、デリダは発生と構造のアポリアを再度取り上げながら、フッサール現象学における目的論的な直観主義——現前性の称揚——を批判する（第2章）。次に、『幾何学の起源』序説（1962年）において、デリダはイポリットのヘーゲル解釈の影響を受けて、同じ発生と構造の弁証法の図式を、言語と差異の観点から再定式化することになる（第5章）。ここで、デリダのいう「根源的弁証法」とは、「絶対的起源の根源的差異」（89）のことである。つまりそれは、エクリチュールという言語構造によって支えられた、差異をその内に含む内在性なのである。

しかしながら、ロウラーが述べるところによると、『幾何学の起源』序説の段階でのデリダの思考は、いまだフッサールのないしハイデガー的な存在—現象学（*onto-phenomenology*）の次元に留まっている。デリダがこの次元を脱することになるのは、本書の見立てによると、「暴力と形而上学」（1964年、『エクリチュールと差異』への収録は1967年）においてである（第6章）。「暴力と形而上学」において、デリダはレヴィナス『全体性と無限』における他性の概念を洗練させ、「他者の超越の非—ギリシア的な発生的思考と、同一者（同一性ではなく差異であるような）の内在性のギリシア的な構造主義的思考とを「アマルガムにする」（146）ことを試みる。つまりここでは、非—ギリシア的な思考（レヴィナス的な形而上学）とギリシア的な思考（フッサールおよびハイデガーの存在—現象学）の、すなわち他性の超越と差異の内在（「根源的弁証法」）の弁証法が記述されているのである。

『声と現象』（1967年）におけるフッサール現象学への批判、あるいは現前の形而上学の脱構築は、「暴力と形而上学」において確立されたこの弁証法の図式に基づいて行われることになる（第7章）。その意味で、「暴力と形而上学」におけるデリダの取り組みは、彼の「最初の脱構築」に他ならないのである（146）。

このようにして、発生と構造の弁証法は、他性と差異の弁証法へと形を変

えながら、デリダの初期思想に通底する根本的な図式として理論的に重要な位置を占め続けることになる。このことが本書の中心的な主張である。

4. 評価

本書は、1990年によく刊行された学位論文(『フッサール哲学における発生の問題』)を含むデリダの初期著作の体系的な研究として貴重であるというだけでなく、当時のデリダが(明示的ないし非明示的に)参照したフランク、チャン・デュク・タオ、カヴァイエス、イポリットといった研究者たちのテキストを詳細に検討し、それらのテキストがデリダの思想形成に対して与えた決定的な影響を正確に診断しているという点で、比類のない価値をもつ。また、第3節において概略的に示したように、発生と構造の弁証法という軸によって初期デリダの難解な記述を整理し、その首尾一貫した読解を提示する本書は、以降の初期デリダ研究にとって避けて通ることのできない試金石としての価値を有すると言えるだろう。加えて、本書が提示するデリダの「非ギリシア的」(non-Greek)な思考、あるいは「アポリアの体験」(the experience of the aporia) (167)は、「暴力と形而上学」におけるデリダのレヴィナス批判を再評価し、初期デリダの思想形成を展望するための新たな観点をそこに見出そうとするものであり、独創的かつ重要な論点を提供するものであると言える。

とはいえ、本書の特徴の一つであるその主題の広範さは、「デリダとフッサール」という(本書の題名に掲げられている)テーマを目立たないものにしてしまっているかもしれない。特に本書の中心的なテーマである「非ギリシア的な思考」はデリダのレヴィナス論から取り出されたものであるから、本書の主題は本質的には「デリダとレヴィナス」であるとさえ言えるかもしれない。あるいは、序文において真っ先に(デリダよりも先に!)名前が挙げられる(1)とともに、本書全体を通してつねに重要な理論的地位を占めることを考慮して、「デリダとハイデガー」こそが本書のテーマである、としてもよいだろう。

また、第一の点と関連して注意しなければならないのは、本書は実際には「デリダとフッサール」というよりもむしろ「デリダにおけるフッサール」、

あるいは「フッサールとともにあるデリダ」を扱うものであるということである。本書におけるフッサールは、デリダの思想形成期においてデリダないし他の解釈者たちによって翻訳された限りにおけるフッサールであって、それらの解釈を超えるフッサール、デリダ的な思考に収まることのないフッサールが記述されることはない。本書の主役はデリダであり、フッサールはデリダの思考を整理して示すための補助線として登場するに過ぎない。

しかしながら、以上指摘した二つの点は、上に挙げた本書固有の価値を少しも毀損しない。本書が初期デリダ研究において現在もなお参照されるべき重要な書物であることに変わりはないのである。

参考文献

Derrida, J., 2013, *Heidegger : la question de l'Être et l'Histoire : Cours à l'ENS-Ulm 1964-1965*, Paris, Éditions Galilée.

亀井大輔 2019 『デリダ：歴史の思考』、東京都、法政大学出版局。